

デジタル時津百人一首かるたでふるさとパワーアップ

— ICTを活用した地域・学校との連携 —

青雲学園 常勤講師 江崎敏夫

キーワード：地域資源のデジタル化、地域・学校連携

1. はじめに

本学園は、北は仙台、南は石垣島から生徒が集い（その約40%が寮生活を送っている）、中・高一貫の進学校である。そのため、第二の故郷としての時津町をよりよく知り、地域に貢献するためにICTを活用した活動ができないかを思索し、「時津百人一首かるた」を着想した。

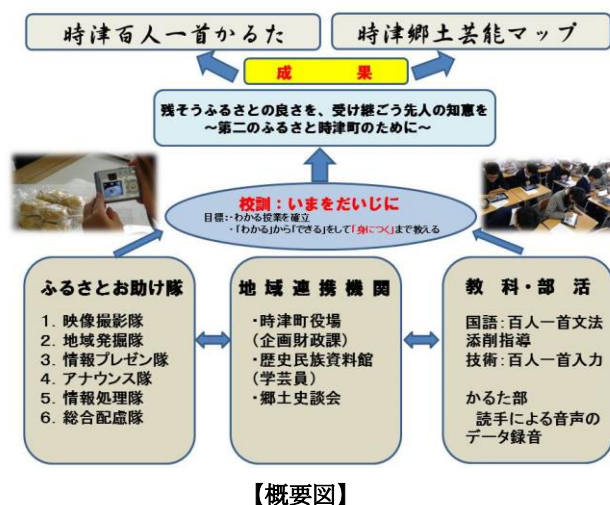
2. 実践の概要

(1) 時津百人一首かるたとは

この「かるた」は、国語・技術の教科、後で述べる「ふるさとお助け隊」、地域の連携により得られたデータをデジタル化し、「かるた台紙」の上に、画像や映像と共に音声データを目に見えぬように印刷する「ドットコード印刷」技術を使った最新式のかるたである。

(2) ふるさとお助け隊

「ふるさとお助け隊」とは、「アナウンス隊」「映像撮影隊」「地域発掘隊」「情報処理隊」「情報プレゼン隊」「総合配慮隊」からなる中学校1年から高校2年生までが所属する同好会組織である。



3. 実践内容

3.1 実践の方法

中3の技術の授業時に詠ませた時津町百人一首の内容の画像を、役場や民俗資料館・インターネット等を利用してデータ収集しカード化、高校のかるた部が、百人一首を音声データとして録音、国語科教師による文法チェックといった協力体制のもと、平成25年度には66首、平成26年度には34首を選出した。今回はそのうち66種にドットコード印刷処理をした。百人一首用の資料を調査中に新たに発掘した「時津郷土芸能」の映像は、地区別の地図を作成し、紙面上に芸能画像を表示し、画像を特殊なメディアペンで押すと郷土芸能が映し出されるように改良した。

3.2 ICT活用の工夫

インターネットや歴史民俗資料館より借用した「時津町ガイドブック」等を使い町内の歴史的な史跡等を調べ、そのデータをもとに、技術の授業で各自「百人一首」を詠んでいく。入力には、書いた文字やイラスト等がペンの中に保存される電子ペン「N2 Smart pen」を使った。このペンには、制作過程をリプレイできる機能が搭載されており、後から評価を行う際に非常に役立った。イラストや映像がそろわない生徒については、同好会の映像撮影隊やイラスト隊が協力し、必要な映像をデジタルカメラで撮影し提供した。映像にアナウンスを付ける際には、当初各人の声で行こうかと思ったが、百人一首の読み方は独特のために、なかなかうまくいかず、アナウンス隊（かるた部）に協力してもらい、ボイスレコーダに録音し活用した。データは「かるた」の形式に各自が配置し、編集ソフト「CASTER」で「時津百人一首かるた」が完成した。「かるた」に印刷された映像・音声データは先端にスキャナが埋め込まれている「メディアペン」で読み取る。データはメディアペンから無線でメディアプレーヤーに飛び電子黒板やプロジェクターを通し大画面で表示されるシステムである。



3.3 実践の特徴とねらい

ふるさとを離れ、時津町で生活する生徒達にとって、時津町は「第二のふるさと」である。技術の授業で「時津百人一首かるた」を提案したときに、ほとんどの生徒が町の歴史等については皆無であった。町の歴史・芸能等を調査するにあたり、インターネットからの情

報だけでなく、歴史民族資料館の図書や郷土史談会発行の「時津町ガイドブック」といった本の情報も参考にさせた。当然近場では取材を行い、データを構築し、百人一首を詠む参考資料とした。インターネットがすべてと考えていた生徒達にとって、これまで人間が構築してきた「本」という情報を介して調べることも大切であるということ、調査体験をさせることで気づかせ、身につくように構成した。

体験を通し、自ら動くことで成し遂げられた「かるた」は先端的な技術を使った「電子かるた」である。成果物を単に評価するだけでなく、他学年の授業でも活用し、先輩達の活動が、地域に及ぼした影響を、後輩達にも伝え、さらなる展開が出来るように素地を作っていくことも忘れなかった。取材を通して、生徒たちの心に、地域に役立つ活動をすることで、学校を地域が見直し、様々な面で協力してくれることや温かい心で見守られていることを肌で感じさせ、ふるさとの良さを発見させていこうとした。



先輩のかるたを後輩に紹介し、かるた大会を開催

4. 成果

生徒達の興味関心をいかに高め、「ふるさと時津」のために役立てさせるかを考え、事前に役場の企画財政課に行き生徒達の活動内容と趣旨を説明し、資料等の準備をしてもらい取材を行っていった。最初は紙の上の画像にペンが触れると映像や音声流れるということが信じられなかったようだが、見本事例を示すと納得され協力が得られた。生徒達は、いかに機器が優れたものであろうと、その下には人間対人間の付き合いが必要であることを改めて知ることになった。また、同好会のメンバーも、先輩達の詠んだ句に合う映像探

しは優しいものではなかった。時間のかかる調査と入念な取材といったことが必要となる。その際に、単純に取材するのではなく、どのように聞くといいのか、必要な情報をうまく得るためには、どのように相手に説明しなければいけないのかなど多くの体験を重ねることが生徒達を成長させたようである。さらに、取材した時には、総合配慮隊の制作した「消しゴムブックマーク」をお礼に差し上げた。このささやかなお礼が、取材された人の心を打ち、貴重な60周年記念に作られた「時津町郷土芸能DVD」を借用できただけでなく、編集も許可され「デジタル版：時津郷土芸能マップ」も制作できた。このマップは、60周年記念式典の際記録された郷土芸能を分割し、地区ごとにマップ上の映像をペンで押すと瞬時に、その地区の芸能が流れるよう青雲学園で再編集したものである。



また、住民に対する取材時には、大半の住民が青雲学園を「進学校である」ゆえに、地域活動には不活発な学校と見ていたに違いあるまい。しかし、「時津町のために」活動する生徒達の姿に共感を示し、生徒達に多くの褒め言葉をかけてくれたことは、彼らに大きな自信となりえた。

5. 今後に向けて



【企画財政課・郷土民芸資料館学芸員への成果報告】

お世話になった町の方々に成果を報告し、百人一首かるたを見せた時に、学校が生徒達と取り組んだ「時津百人一首」の存在を喜ぶとともに、残りの34首の完成を心待ちにされていることがわかった。現在、後輩生徒達が完成を目指し、取材活動に入っている。すでに、34首は選出し、必要な映像を手に入れる段階にまでできたので、本年度中には完成し、箱入り「時津百人一首かるた」を制作し、提供しようと計画中である。